

春色梅見布叔男

^ 13
2902
5止



門へ 13
號 2902
卷 5

春色梅羨婦祢第五編叙

此書籍ヲ賣却スル者アル時ハ眞子ニ傳テ知ラセテ津田安麿

源氏之堅横の並びあり 彌所空翠夕顔ハ

第木老堅うゝゝ紅梅中 竹川と白宮の

横ぬるあごと 這き最ふしき文はみそ。

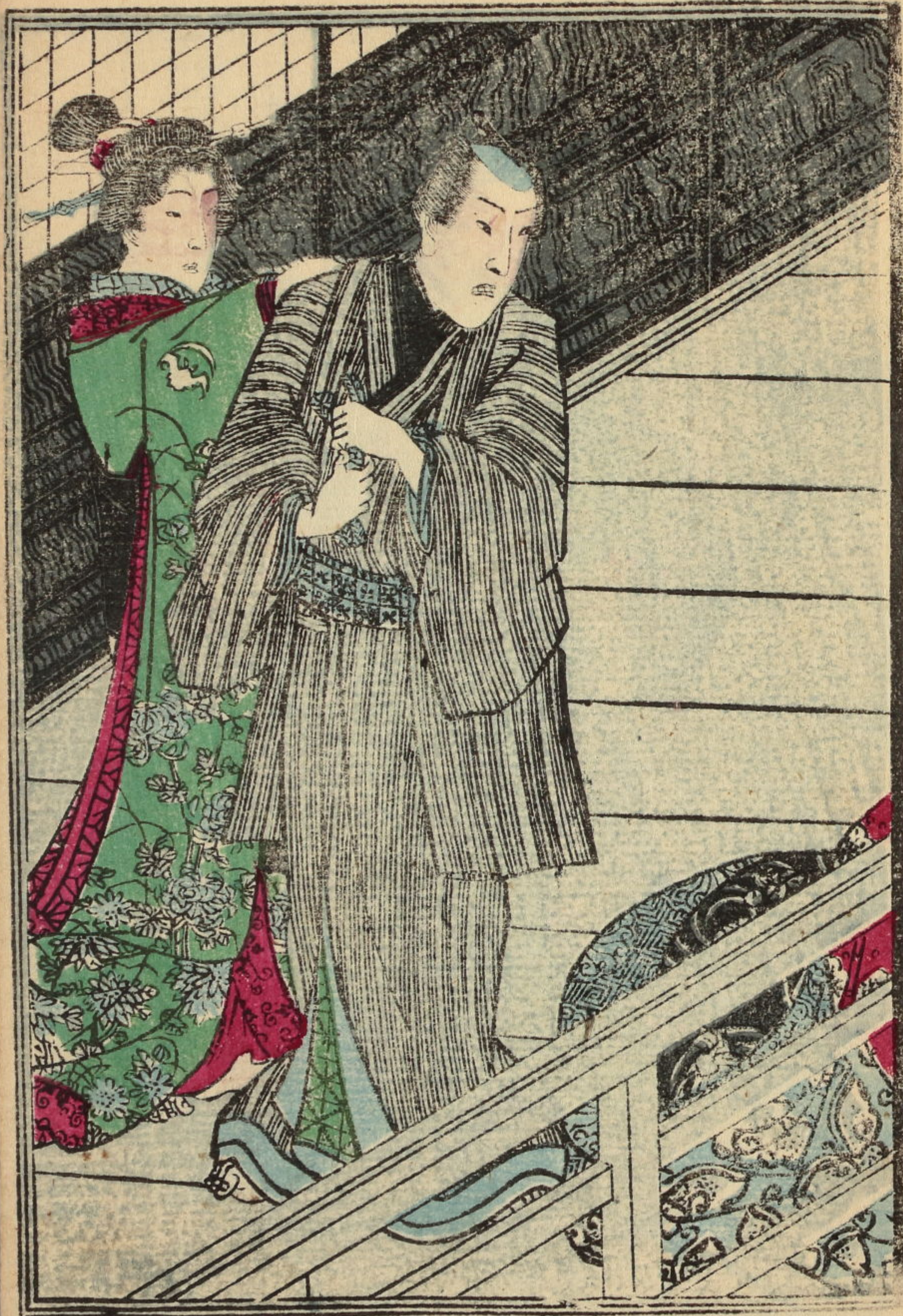
企乃るぶよのゝゆども 僕が築ふる横堅信

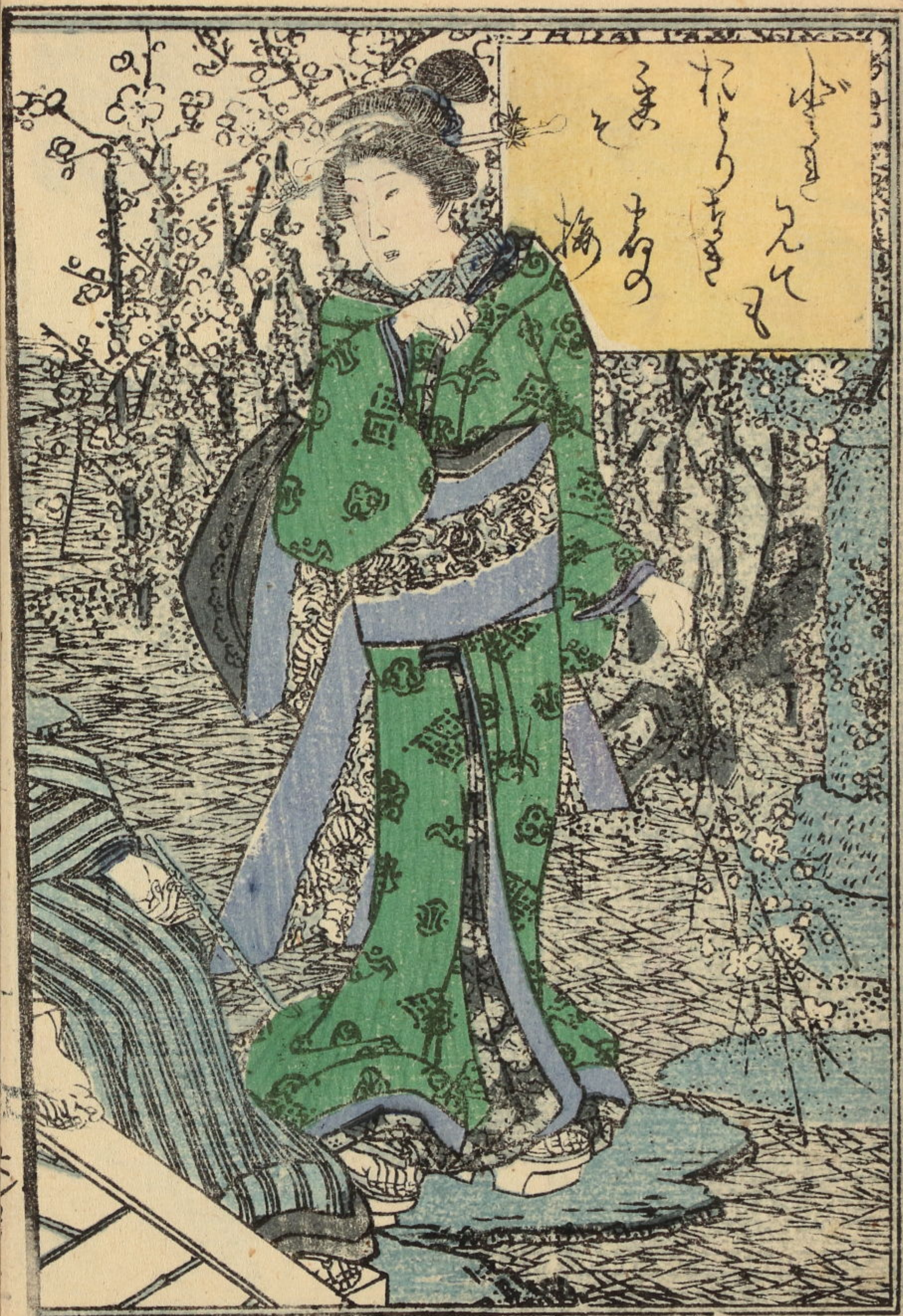
崩が捨まバ 媚る余残入そまき心も 時代がゆく

昭和九年
七月五日
購求

草色^{くさいろ}を^ら。紺桔梗^{こんききやう}を^ら。深^{こほろ}に^ら。多^{おほく}くも
 分^わらぬ中^{なかに}を^ら。結^{むす}ぶ^ま。介^ま介^ま。八^や八^や。柳^{やなぎ}柳^{やなぎ}。吉^{きち}吉^{きち}。衣^え衣^え。己^{おのれ}の^ら。
 園^{その}に^ら。多^{おほく}く。結^{むす}ぶ^ま。局^ま局^ま。を^ら。西^{にし}云^いつ^ら。れ^ら。と^ら。思^{おも}ひ^のの^ら。
 英^{えい}對^{たい}談^{だん}語^ご。黄^{わう}粉^{ふん}を^ら。は^ら。者^{もの}。日^に取^と一^{いつ}ッ^つ。大^{だい}方^{ほう}げ^く。
 梅^{うめ}美^み婦^ふ。祢^ね又^{また}呀^や。匠^{しやう}匠^{しやう}。物^{もの}。珍^{ちん}く^ら。ハ^は。豈^{あや}を^ら。横^{よこ}た^らる。
 格^{かく}子^し。縞^{こう}箒^{しゆう}も^ら。加^かき^らり^に。織^{おり}ま^ら。と^ら。恥^ちを^ら。晒^{さら}た^らる。

乙^{おと}女^めの^ら。美^みの^ら。切^き婦^ふ子^し。を^ら。し^ら。し^ら。の^ら。と^ら。預^{あづか}り^まえ^ん。
 女^め三^{さん}れ^れ。猫^{ねこ}が^ら。ニ^にヤ^やア^あン^ん。少^{せう}女^{にょ}。知^ちら^らぬ^ら。思^{おも}ひ^の。考^{かう}が^ら。筆^{ひつ}。拍^{ぱく}子^し。
 乙^{おと}女^めの^ら。美^みの^ら。切^き婦^ふ子^し。を^ら。し^ら。し^ら。の^ら。と^ら。預^{あづか}り^まえ^ん。
 若^わ菜^{さい}の^ら。丈^{ぢやう}ふ^らる^ら。心^{こころ}。横^{よこ}雲^{うん}。朝^{あさ}。曙^{しやう}の^ら。
 梅^{うめ}花^{はな}の^ら。中^{なかに}。め^ら。く^ら。筆^{ひつ}。拍^{ぱく}子^し。を^ら。し^ら。し^ら。の^ら。と^ら。預^{あづか}り^まえ^ん。
 為^な永^{えい}春^{しゆん}水^{すい}誌^しの^ら。







春色梅羨婦袷卷之十三

江戸

為永春水著

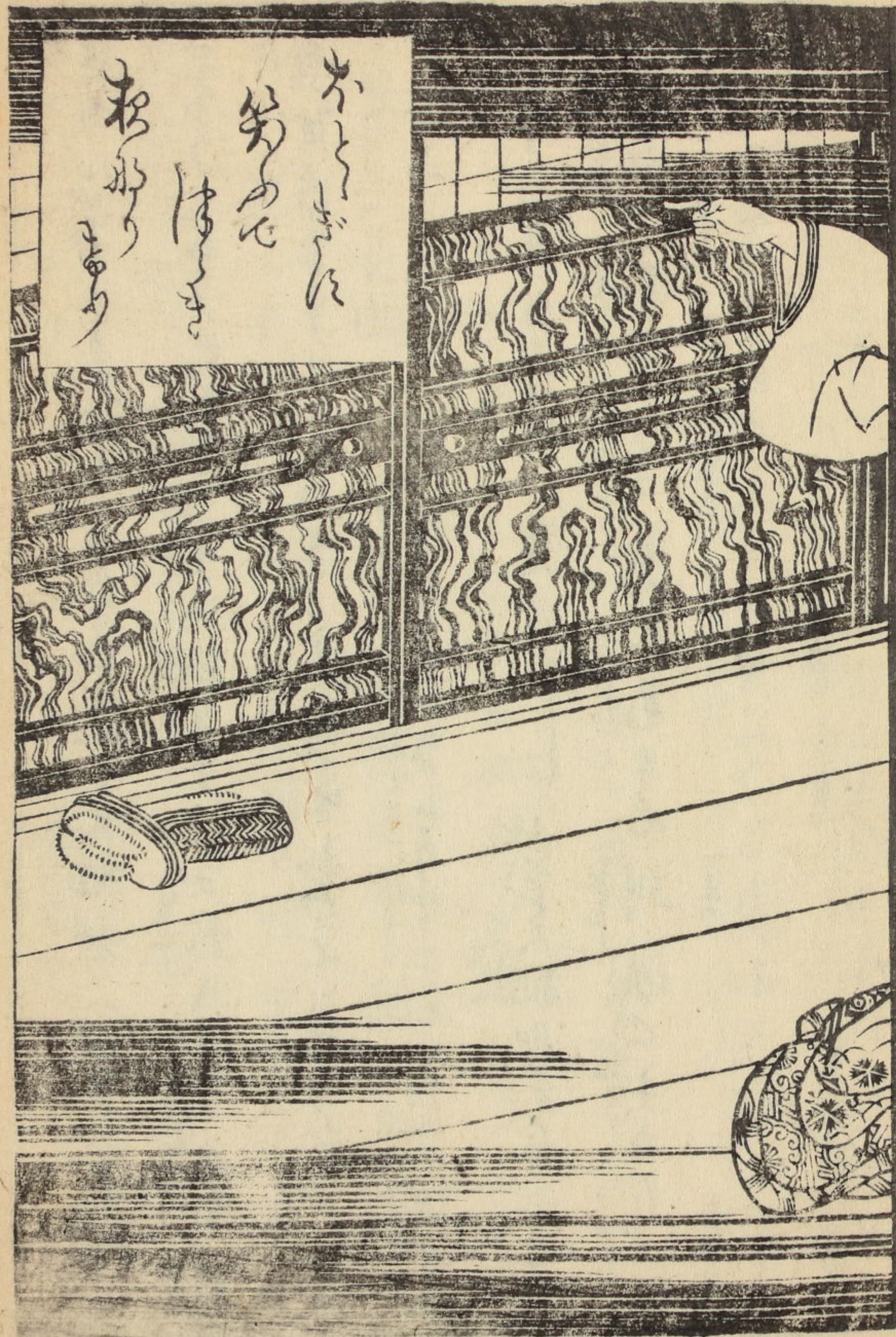


第廿五回

九時の拍子木の音ハコンコンと
 一按磨アリト宵の澄ぎふ引替くひつそりとせし唐琴
 屋の表座敷へ送りし客を床におきめて次の方より
 静ろ小廊下へ立出るお園物をあつらひしきホット息持
 ちも暮らるる雛妓け花

あつこのんぎぬをくらお茶たん所の産婆ともみおどろけ
其ノ其知へま寺内の判事今方未だあつん何ぞ
真なる吐くごあつまひりのと娼妓も魅きゆくのぎぬ
甘ううう素して進てお呉るま一ト言ひまごお園ハ
グツトせーが態と笑ひお終らしくま一ツヤまおやア
ま程もあつません子エおも判きんお言ひせこのまね
りがあつま一あけヨお知の産婆ごう序おお同おあつ
性おのめあつま子エお一あつおあつま一アハ

蕙きんの産婆の膝ぎぬをくらま一ツヤまおやア笑の
突あつごあつま子花一アあ角の六ぎぬをくら
あつお茶たんお肉が買う後刺をむ柱んおお在るま
あつお茶たんお進中うと思つてあつんあつこのもの
あつまひくらま一ア嬉し急度心あつまひ久又空言
あつア也免ご子エ花一十三今夜う実心お美物ぎぬをヨ
ト言ひくらま進出しくゆく
什寢らのお園がころ一夜お判決席方お止宿一時



と
よるまむを定めておつて居るごらうくその女の
名紙をのぐ置つたよ 此ハホニ主あやうはんまうごぬま
とんりああうをまんまはさう言ひままご置つご
まはく判ハ俗年速く安んぬの 此ハレマアまごぬま
久まあやう主しやアか園さんハお板なるまはのぞ
判ハ 此ハレお見まう一覽へがおらんまませうご判ハ
アハレおとまふくと思つたうまんご点ちがひを言ひ
よの赤お園といふ娘ハおつても居るが世話もなるごらハ

あつてはごも全くおつておん奴トやアねん那ハ據ね義理
會心 此ハ情女おんまう一のぎぬま久 判ハ正情女の
意のとそんまはごらうあやうねん大うごらやア赤八が
何とら言つごのごらう 此ハ主赤八まんごらうい
せんた赤八まんが性しごごまもまはと落合て主は
見見とあままう一も主しやア其ごまもあつたごら
かのごまごらうしごごらうり居ままうごごらやアあつて
うま後赤八まんが私の所へ来るまう一判まんもあつて

も放しく重た見なませば主ハ堅くあるもいつのり
でも然うたうりもたうりゆのゆでま新が男の徳ぎぬを
うう候令座やあとのまハあつてもお茶さんの顔さん
汚まぬと宜と存なまし一私も丹さんで覚へがわり
まはううとあまうぐと言ひるまし一ゆのを私まやゆて
嬉しくぎぬし一ヨ然う言うちやア悪うぎぬまが私が
は店へゆきうう今年で丁度七年ぎぬまがゆの
とうりの月境ぎぬまが茶八さんゆやうぎぬまが離

妓流や貝女流がほどいはず小食いせんびふ幸ひと
私が新うあつて座敷とたつて居まはううと利て
資けくゆり人ハ我をぶるあまはせんけまども
今でもまうりと思つて私の一まうりあつて呉るゆのハ
茶八さんたうりぎぬまはヨゆるも千葉の後さんかまさ
あつてお茶も今年八年明ごとゆりまうりままどあ
ゆ率判きんを以茶の身分ゆ一七圓出度ま辨ふして
まうりまいと茶八ゆも落ぐゆ一もたうりまうりまうり
まうりまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり

くさひぶぬまヨホンニ後さんや茶八さんが種々深切の
言ふて呉んうまはふつけても私まやア一回も速く遠
廊を出て主の側小居る中ふりふいと永のきり月
指を折りに保しん心居るさぬとゆのせ今きり主が
そんな心居て居んうまやアあんまり可憐さを
さぬに人判へそりやアア道程ぶが先判りう言ふと
遠方ふあなりぬさうさ詮方がぬまともゆも解へくハ
お園と叫ん心明をさぬと見えやうり此へそんな志度

然うさぬと子姪しうさぬとまどやア私がお願ひが有り
まはが叶へくお呉るさぬ判へぬさう改まるさ言ひ極
ぶの陸公は身ぬ出まらぬさうさまるさうマア言ひて見ぬ
まはしあうりさると言ひるませんよやア吾さぬと判へ
まはさぬ一天の川の鯉をとくつて赤く漬汁ふ
あ七喰せうとち天狗さぬの玉子をぬらして赤く焼
緑蒸ぬさうとち言ひまると連も出来ぬさうさマア
言ひて見ると言ひるのヨハハハ主しやア余程さぬ

き ちぢぬまヨねまやア戯言トやうい真ふお頼まが
あるンぢぬまうう獲を極く関てお呉るまーヨ判ハ
軽や王子心ね人まぶ真面お笑くうう言ひさ登之
夫ぢやア言ひま次が子ゆ率おがお頼ひぶら浮れ心
まくお園さんと晴合ふらうて進てお呉るまート
言ひまきく果う判次郎ハ須臾言語もあぢぢりける

第廿六回

けあ目お持一候と様へやうりと盈一判ハ
判さん

これ心おの知のうらなも控量一てお呉るま判ハと
アモアモお茶の涼切ハな一まうて居るけまお園の
うを頼ひとゆのハぶもお解ねノウ中らなり此
身がゆ振々の情曲があると思つて速もぢううつこ
うあう詮方があうう解ま忍ん心とまらうより奇
衆お乃を美の方か寐覚が宜ひとゆあう第お今
やうお言つて呉るるのぢやア実お眼まぶせけハ工
あう思つて呉るまーちやアおの方とを眼まぢぬまヨ

お園さんの身のうらハ泳く顔もささるひがあらん
さぬささる 未始終私も此所の積り心居るはくさ
主もささる心見捨て進んお異りも次なヨ判「何れも
うさく分解ねんさして泳くおまことと六堆おお
まさこのごらう けその類人さぬと久ト言ひりけ
おー舞もぐ判「し見ね出さるおんごらうお速
お人の名が男ひつるさぬ けアサせんお疑ひるぬ
ちやア躍さぬをヨそのおんご人とおのハ那腰のおお

さんの小唄さるたおのとよ仁さぬまが主も大方あらん
お在るまが子判「五何れさるさ 那仁が「サア是る
宅お師のちや遊「のち今おひおしも凄然さる
ちやさぬまが子五日たうり跡の眺お雨が大さう 降「つさ
と 変がりりま「さう子那とき私さるア獨り心産「さみ
寝て居るはと羨とも現ともさくささるたおのさんとのん
仁が枕元へ来るさ「モウく無「の力のうお吐「はく
お子と変て見るとおのちも義理のあら 伯父さん

さういふとき伯父さんが言ひなすはあやうい
死にまはすも不便さの八娘お園お園お園お園お園
縁づり判次郎を哀慕の他の男ハ持まゐと處女心
思ひ込んずも判次郎ハ何れも和女ハ妾を立通し
外面ハゆき見せつけも心の庭ハおまね振子も
見よと心なす情合と知りまゐり狂にむすハ子
周和女が今も廊を出て判次郎と夫婦あつた
番でもお園を引取て高とまて六ゆりむともせめ
判

次郎の側へゑとわくまゐりい言葉でもうけと
やうなバ身ハ素より草葉の蔭でけ身も何れ
嫉しくうらうらとむすと言ひなすはあやうい
清合とお園さんと六娘お園お園お園お園お園
判次郎と大いなるお園お園お園お園お園お園
おまねと云うはあやうい伯父さんがお園
あやういお園お園お園お園お園お園お園
おまねお園お園お園お園お園お園お園
おまねお園お園お園お園お園お園お園



此の糸が
於園を情
全うに



胸むねうせせーが小こ愛あみみーけハハおお園園ままんんぎぎぬぬとと久久 そのハハ獨獨妓妓
境えん忍にんししくくおお異いるるままんんのの是是也也ありありままんんヨヨトトおおををもも言言ひひのの是是
手てとと合あををろろーあががままりり泣ないいままハハアアレレササををんんのの泣な顔顔をを
ああとと誰たれぞぞ見みるるとと悪わるううぎぎぬぬととヨヨ史しトトやや今いまののののをを受うけけ
ままーまのの久く まハハイイ私わたしままややおお茶ちやままんんのの血ち縁えん切きハハ死しんんもも
忘わしし六ろく乃のまませせんんヨヨハハナナニニササををんんのの涙なみだトトややああいいがが子こハハ一いち度ど
異いひひおおぎぎぬぬととろろくく上じやう襲しやうとと初はつううろろままままーまんんトト言いひひ
のの卒そつ度ど税ぜい也也おお園園ふふととおおををるるままんんのの身みふふとと寄よせせくくけけーけ

子こ。買かううぎぎぬぬままろろトト言いひひままんん顔かほをを赤あかららぬぬままろろ そのままもも
そそんんののをを乃のちちやや何なんれれももおお茶ちやままんんのの血ちのの毒どくくく
ありありままんんののととハハアアレレササををんんのの死しがが入いるるのの子こ何なん
もも判はんんがが私わたしとと思おもうう種しゆくくののりりとと言いひひままろろとともも
先まににててままんん居いるるまませせばば買かううぎぎぬぬとと思おもうう思おもいい可か也也
ががららにに苦くひひののままろろトト言いひひのの捨すててけけれれハハ上じやう草そう履りままろろ
おお園園ふふととままろろハハ素す直ちやく心しんををどどくくとと表あはたたすすままろろハハ
外とへへゆゆくく心こころのの中ちゆうををおおももろろけけるる

藤ねこそうごそりて多まきいりく大おほきうふりて居ゐる
おちやねくト言いども先まづ口くち居ゐるゆゑ小こ判はんへはごおも言いふ
ねてうろ分ぶん解かいの那な方かたの彦ひこ妻つまを何なにの後あととまて来きこの
だかコウ余よ所ところで乃なり千ち結むす喧けん嘩かを以もつ身みの所ところへ持もつて来きて
出でつて呉くれちやや迷まよ惑ごつどぞ。エエ以もつ来きまとも那な程ほど持もつつて
居ゐる呉くれちと約束やくそくを乃なりく言いふこのふけ身みが藤ねて居ゐる
うま心こころ後あととまこのうか茶ちや中ちゆう似に合あひね人ひとあんまり
初はじめなるトもやねくコレサの故ゆゑ先まづ口くち居ゐるのこまは根ね小こ
け

言いつても物ものを言いふねくも振ふるぜト言いども中ちゆうなり先まづ
言いふ居ゐる由よし判はんへはハ強ちやう性じやうの婦めづ女にょトややねくせん
ふ言いふねと乃なりも言いふ這こゝろ方かたも言いふ此こゝろ方かたも言いふ
利きせき見みせきト言いふひつりり寄よ添と入いりおしも
ゆねりんたごり連れん子こよりき込こむ灯あかり顔かほ見み合あひ
判はんへはお茶ちやお園そのさんトややねくそのへ判はんさん據く懸けんして
お呉くれちとト言いふせん物ものり判はん次第しだいの差さうとのを思おもひ
ける

元 是よりお園の氏系が深き時を御承りのことづら
 りぬ月の言訳を候るがうおたる程ふ判次亦も
 今更ふ最茶は系が言系との捨格ときおの
 何と云ふ世と二世のりとも深き和合と云ふ
 とぞ

春色梅羨婦祢卷之十三

春色梅羨婦祢卷之十四

江戸 爲永春水著

第七七回

七字の利益ありうらる折の内のお法寺へ日毎の
 齋詣群集ると祖師の考りぞ考とけは遠ふあがと
 家名せし當地ふ名高き料理店の門不後心三人連
 へトキニ梅舟さん何是折の内のお帰うハ小川ウ此店が
 まりの建場が身後一口氣とつけの後ハ内店の捨

公とまるとも何れとも何れも此は多少大段とを言ふ。ハイ
捨女と言へば豊倉の門へ妙子妓女が出平し。コレサ
お茶の直お茶の方へお茶を越せしむるね人アテを借入後院へ
早く南里さんの鏡の通りまで一盃とらん。行が極く
妙子。一丈トヤア角も角も吞ぢのうゑの心分列とばる
直ひと言ひまぐら皆々あぐまきの買を委へ通り程き
鉦の酒肴も出て三個ハ欣うけあぐら。へ辺トヤア竹の
子と蕨の旬がまじるとのらべいと玉子とらぶがな願とお

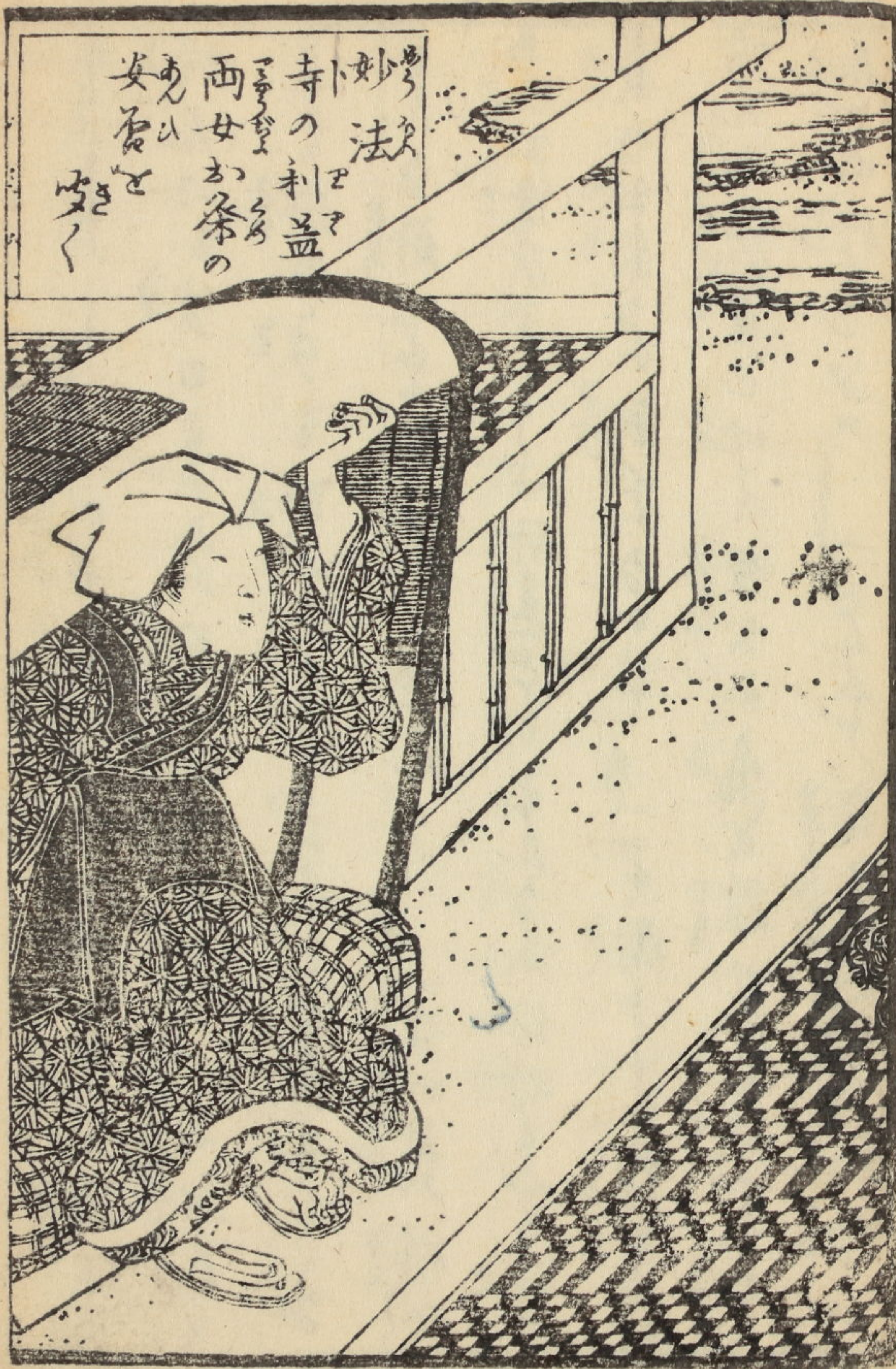
料理どころ。兎角山家の体ハ外とね人沢サ子
ハイヤ。然うする麻小為このものでもねノサ生肴も喰ふ
せろと言やアありやまけまども遠所へ来ちやアアちや
ぶえん。玉子の方が洒落て居やまノサトキ春好さん先
刺ちよらびり序びらまきのあらう。豊倉の妓女といふのハ
何れも支小然て一奇談ありら子。へあるのまのときねる
ちよらくる訳トヤアありやせん。寛小奇と妙くといふ。同縁の
ある妓女サ。へ何れもあらんまり。姑の言をまが大人とらうどころ

髪つゝ 覺來人 咄しど 何是 眉毛 不 唾で 吹く 方が 大丈 丈
らしん。 一ナサ 此の 小あひん 正 眞正 徳の 眞緑サ 一丈
トヤヤ 言他ハ せん 喧言 ごと 又の 一トト 東西 子 何ふ
ちり 横絵と 入を ねん 心 吹べー サ 未知 ぎ 妓女 ぐ 何 ねん
因縁 ぐ あり や 一先 ちの 女の 素生 と いら 一 天竺 ありん
玉藻 糸 一 ちり や 又 ちり まる 一 梅舟 さん も 困ら 一 疝の
突ど 一 全体 期う 一 又 性 火 柳の 虫 一 番 一 ち 拾て 處と
鼻の下 せ 赤く 一 一 縁 番 や 火 粹の 灰 せ 越 ぐ ぐ ぐ ぐ の ぐ

くろ 一 一 何 方 せ 何 程 と も 團扇 の 揚 中 も ね へ 訳 ぐ
宅 小 感 心 小 ち ち や ぐ ね ぐ ち の ち ち 一 一 一 一 一 一
消 ぐ 著 ぐ 仕 兼 と ち ち 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ツイ 扱道 へ 咄 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
西 小 咄 ち ち 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
咄 一
あ 小 枝 名 ち ち 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
く ち ち 一

げいしや そのおと ちまら 血道をひげに居るもん おとら 男の方
でも わが 足 よ を履て あ 首 こ の丈 こ へ あ 勿 も 論 え その あ 苦 こ の あ 度 と ごと と
候勤の身 あ 心 こ 見 み ば あ び ひ どの あ 工 く 面 めん を あ る ら ち ち や や 自 お 中 ちゆう の
遠 あ る る も あ 為 い 中 ちゆう の あ 沢 たく ごと と 揚 あ 屋 や 町 ちゆう の あ さ さ る あ 婆 あ ア あ さ さ ん の
肉 あ と あ 内 あ 澄 あ 心 あ 頼 あ ん あ 心 あ 朝 あ 陽 あ や あ お あ 寄 あ ふ あ と あ つ あ け あ て あ ち あ ん あ く
鴨 あ の あ 小 あ 濁 あ 立 あ サ あ へ あ う あ ま あ い あ ま あ く あ へ あ を あ ま あ 心 あ 知 あ じ あ ば あ ふ あ 居
ま あ ば あ 宜 あ い あ け あ じ あ ども あ 同 あ 角 あ の あ 迷 あ い あ 那 あ 廊 あ ごと あ ら あ 申 あ 宿 あ 遠
入 あ を あ ま あ る あ り あ が あ 直 あ ふ あ 不 あ 町 あ へ あ ら あ と あ 一 あ 七 あ 親 あ 方 あ の あ 耳 あ へ あ も あ 遠

入 あ の あ ん あ ぶ あ ぐ あ ら あ 廊 あ 中 あ を あ 選 あ ひ あ 拵 あ 入 あ ま あ の あ 當 あ 時 あ 遠 あ 方 あ の あ 費
倉 あ へ あ 来 あ る あ 拵 あ 入 あ と あ ら あ の あ ごと あ 容 あ 貌 あ が あ ら あ る あ 美 あ の あ
氣 あ 赤 あ の あ 心 あ 陸 あ 分 あ 建 あ 行 あ も あ あ あ る あ と あ り あ の あ ごと あ ら あ 寸 あ 志 あ の
の あ る あ 久 あ 遠 あ へ あ ね あ る あ 其 あ 男 あ の あ 中 あ ち あ ち あ ら あ 離 あ 是 あ ごと あ ぶ あ
房 あ の あ ら あ ぐ あ 遠 あ 方 あ の あ ら あ ら あ ぐ あ ら あ 八 あ ま あ じ あ 性 あ ね あ 板 あ 子 あ ごと
け あ じ あ ども あ 何 あ じ あ 然 あ う あ の あ 焼 あ 木 あ 檜 あ ト あ や あ 消 あ ま あ ら あ じ あ 本
中 あ へ あ ね あ 入 あ 拵 あ へ あ せん あ の あ 美 あ しく あ の あ を あ ま あ じ あ ども あ ま あ ぐ あ ぬ
あ あ ら あ と あ り あ ら あ ぐ あ どん あ の あ 野 あ 良 あ ぐ あ 見 あ 入 あ 事 あ ぐ あ 入 あ の あ ぶ



あつしは久々 来 一ひる新川亭の老女さんが降巫を
降ん心お使のときみお心も怖ろし人ふ取巻
まき廻るりも帰るともうらまいと云ひまうし
そんな新トやうと云るもせんえ ト 一具ハ怖い
あふお逢ひぶとさうごけまどもそんなふの時も帰る
まの出来さの飲ぶさの弁 房 トや贈さし降巫
あんな嘘言をばく母公の心を様せくお後やお茶を
取らに性さしんぶ ト 一とりやア高賣ごうか詮方が

あつしは久々 来 一ひる新川亭の老女さんが降巫を
降ん心お使のときみお心も怖ろし人ふ取巻
まき廻るりも帰るともうらまいと云ひまうし
そんな新トやうと云るもせんえ ト 一具ハ怖い
あふお逢ひぶとさうごけまどもそんなふの時も帰る
まの出来さの飲ぶさの弁 房 トや贈さし降巫
あんな嘘言をばく母公の心を様せくお後やお茶を
取らに性さしんぶ ト 一とりやア高賣ごうか詮方が

腰を知らぬにお存ざらう子 房ハイ浪花屋の小櫓
きんろふ宅お寤う 妮婿のやうふく居まう家
那腰ハハ春年季が明ん今どや 四谷とやらの
お爺さんの處お居るどや ありませんう 其
四谷のお爺さんの所お孫君さんも探ハまて居る
たるとふり心其人の名がうう市良き徳さんと
言のこやうどヨ 房ハア私も小櫓さんの出くま
あふそんな名心ありまうとヨそく大そう 快れ

方どやアありませんう 一ア使ごうか後さんとも 源
交へお存ざらう心子使心は度のもりも相談お出
のどトサ宅お奇妙なるものどやあいのう子エト
彼奈君が鎌倉の尼寺へ住んとて雇ひ一
軒が悪漢あり身と様さまんとおとろし
不思議お其場と道々のそく彼奈君の住年
華お遊子の難をも散りて市良き房が方お
探りてまての仔細お物語り

活まゝの心持が為まはる是とりもそんなおの
内さぬの利益と思ひまはるヨ 房「ホンニ然う心ありまは
ねまふつけいも今度のもい私うゝ起うことごと
ありまはる多姉上さんの行末が知ること言つてのちく
顔と合はさまさ義理とやアありませんうゝ母公の
苦勞をうけうりお茶さんお氣を採せうりし言次
ありまはるお茶さんハ末永く姉上さんを見捨てる心
和合しんお呉んおまはるヨ 兼「アサもんお心細いのを
お言ひおやうお心ごとくおまはるヨ 何卒ゆりハ千葉の
貴嬢さんお茶さんうゝお止るまはる下さるヨ
「アお茶さん房君さん悪い了等ごヨお茶の氣
おやア義理をさるつりておらうけまはるお茶さん
人を強がせる種ごういれども三個が心を合せ然ら
ふのさのちお茶さんと大車おまはるのうよ分別サ
まはるうとのお茶達ハうゝ二個心強も連るいご

活まゝの心持が為まはる是とりもそんなおの
内さぬの利益と思ひまはるヨ 房「ホンニ然う心ありまは
ねまふつけいも今度のもい私うゝ起うことごと
ありまはる多姉上さんの行末が知ること言つてのちく
顔と合はさまさ義理とやアありませんうゝ母公の
苦勞をうけうりお茶さんお氣を採せうりし言次
ありまはるお茶さんハ末永く姉上さんを見捨てる心
和合しんお呉んおまはるヨ 兼「アサもんお心細いのを
お言ひおやうお心ごとくおまはるヨ 何卒ゆりハ千葉の
貴嬢さんお茶さんうゝお止るまはる下さるヨ
「アお茶さん房君さん悪い了等ごヨお茶の氣
おやア義理をさるつりておらうけまはるお茶さん
人を強がせる種ごういれども三個が心を合せ然ら
ふのさのちお茶さんと大車おまはるのうよ分別サ
まはるうとのお茶達ハうゝ二個心強も連るいご

お在まのま 房ふアノウあおお系けいさんさんグ内うちへ内うち籠かご心こころお出でのを
あありまははくくおお店みせの人ひとハ連つららははまませせにに詮せん方かたがあい
くくままへへのの佐さ助すけどんどんととおおんん心こころ来きてて苦くるひひままへへ
行いくくららはは近ちか所ところ小こ鳥とり渡わた寄よりに家いえのの所ところがあるるとといいつつ
私わたし達たちととへへ送おくり込込こんん心こころ性せいままへへヨヨトト言いふふ
佐さ助すけハハ帰かえり来来きりに佐さへへ候まうおお待まちままぐぐとといいふふままへへ
イヤイヤとといいふふ多ち葉たののおお内うち系けいさんさん寔まこと小こ妙まこと心こころおお入いりまへへ
すすトトヤヤ佐さ助すけどんどん今いまもも心こころををおおれれへへ穴あなッッ透とお入いせせてておおままへへ

お内うち系けいさんさん小こ然ぜんうう言いへへヨヨホホ~~~~~佐さへへととんんとと情じやう人にんのの
つつままりりてて表ひき版やとと小こ系けい心こころ子ごのの心こころ馳ち走そうふふよよううりりままへへ
ままへへのの房ふおお~~~~~使しトトややねねららくく心こころががのの子こ王わうササママアアハハ
ちちへへ揚ありりてて一ひと口くちおお香かりりななおお茶ちやののおお版ばんもも来きてて居ゐるるヨヨ
いいまま今いま中ちゆうにに通とほりりのの祝いわ心こころ日ひ光こう責せきめめ合あららててままへへままへへ
ううららおお前まへさんさん方かたののおおははだだがが空くうくくハハままりりくくおお出でくくけけ
おお成なりままへへおお寄よりり二ふた挺たきららくくらら人ひとままりりくく並なら中ちゆうへへのの房ふトトヤヤ
然しからら久くわい私わたし達たちちちややままへへままへへハハ大だい丈じやう丈じやうどどけけままりりここ

らんことお言ひまら詮方があふくらまらん進中子王
まひ 佐へん員おしとを佐佐せ先刻来るとき渡橋忍りくら
よやど 志余程六ヶ安歩行ッろりをまらぬ癖の
元 是より三個六酒食も果々驚ふうちまら輝ぬ
久 川へとも帰りのける

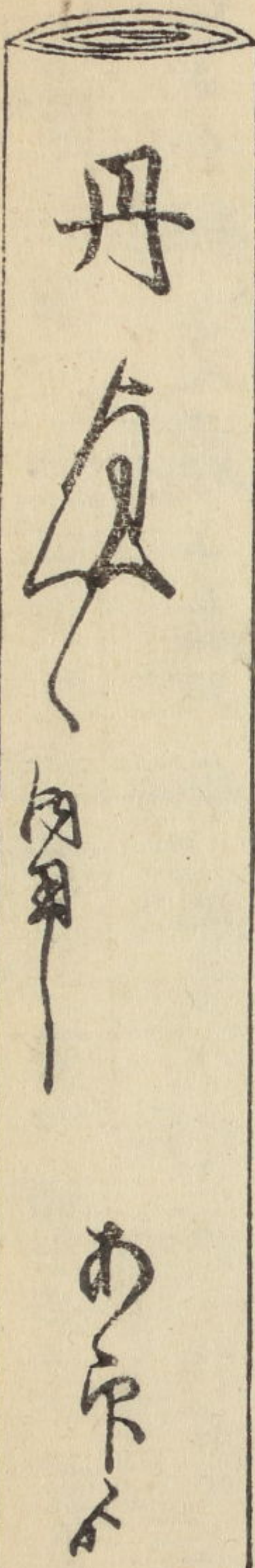
春色梅羨婦祢卷之十四了

春色梅羨婦祢卷之十五

一 江戸 為永春水著

第廿九回

辰巳の園ゆく也存如の那丹次郎が徳住居せし
 其路次はへごとくと今湯坪りの果入が逆忍まん
 せし是元小落散る安を子小取り果是六



「あゝ声 丹さん今母さんが言ふ通り 四合の
叔父さんが尋ねて来ると私の髪を身まきぬいて
きりぬいと云うて七指支とりぬお金を出して呉
れぬ心ありも泣くも交心私が良と洗うて妻人の
まえりやア又叔父さんの方へかゝりぐらひの
元手を出して母さんと私が四養居るやどの小
高心もせせとせと云うて心ありも泣けども
おきやア米八きんとりぬりのりお前さんと横

取をる七米八きんと顔と赤ぬ合つこのを今と
あらん考へて見ると何れも涙をぬいて心ありも泣
くも泣く米八きんふひらの規換を立させと
うぬ心私が勇振と考へぬやア此和歌町を所
娘君と此と顔も泣かぬ者かあらんもう意氣
張りのうぬ顔と出さぬもも言ふは程ふなる
のもは惜しい又那嬢も涙をせんうぬ此度の
七十両ぞ米八きんの勇清をぬいて追ふ相成ぬ母さんも

ども交ねばもふなるまのども顔のまむりもあ
 りあむりねくたはりハ氏身のほろろ何方を
 何故とも言ひゆくの何ぞけきどもお南叔父さん
 大故の命を出しとお茶を身修のあやうといふ
 命を他のまふあちやう 何ぞいふまふりハ母
 ども程く相談をしちのりてありまはヨノウ母
 アイヤ泰田舎の叔父といふの私の中てごいふ
 まはがふりのりろ中遠なる川と久く音

十
 四

信不通で居りまゝの所がまのまをあふ不随
 縁合の意地も抜け両方があつて
 居る所へ今度縁合へ用があまが登つて
 来まゝのいんごろ昔の意根をまのり持て
 娘の身抜け大故の命をもあしと異さす
 どもあまはが子たすハ使ある者どもあまは
 けり娘が茶入さんあまをあつて
 吃度以娘の顔のまむりのあまは異さす

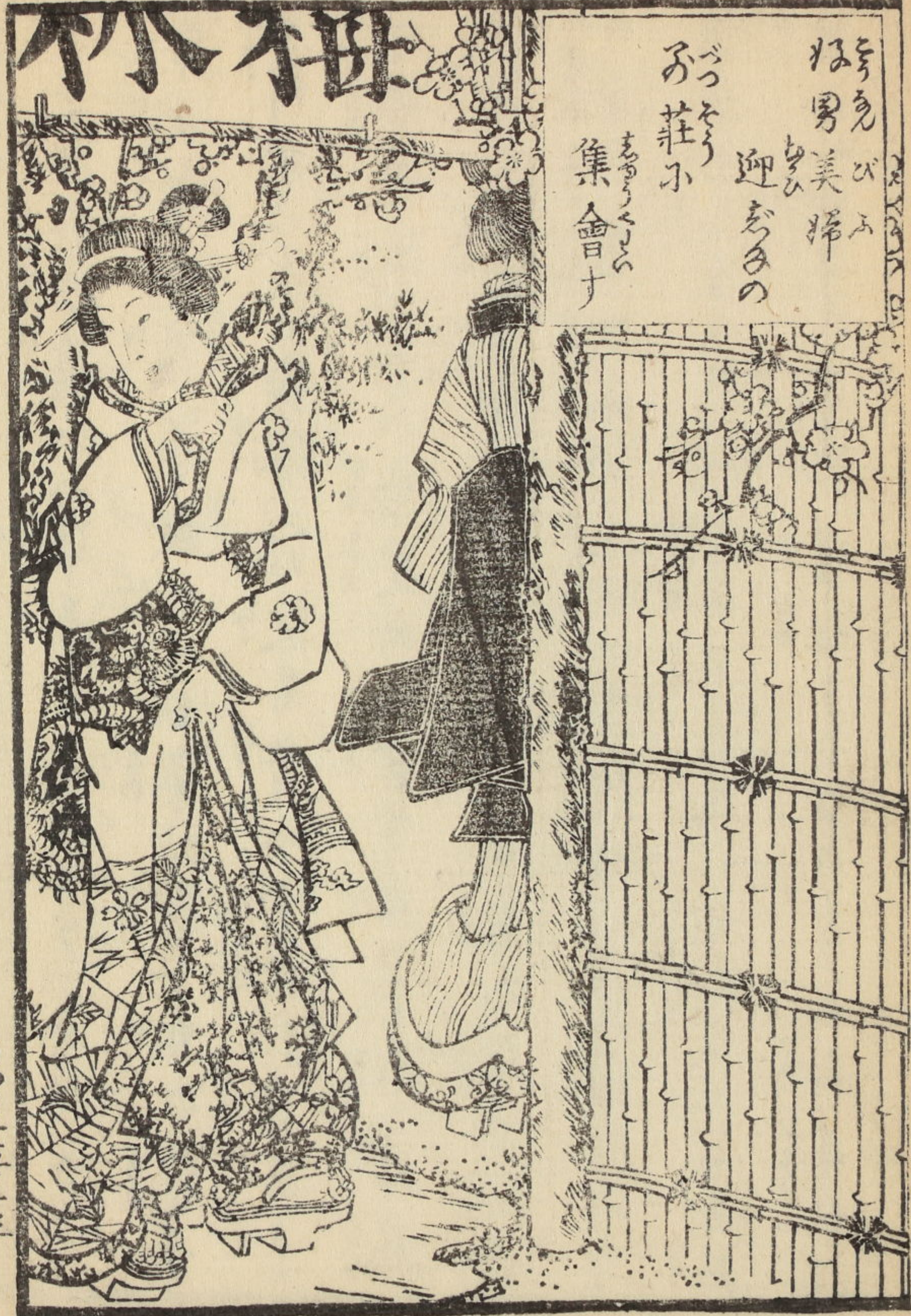
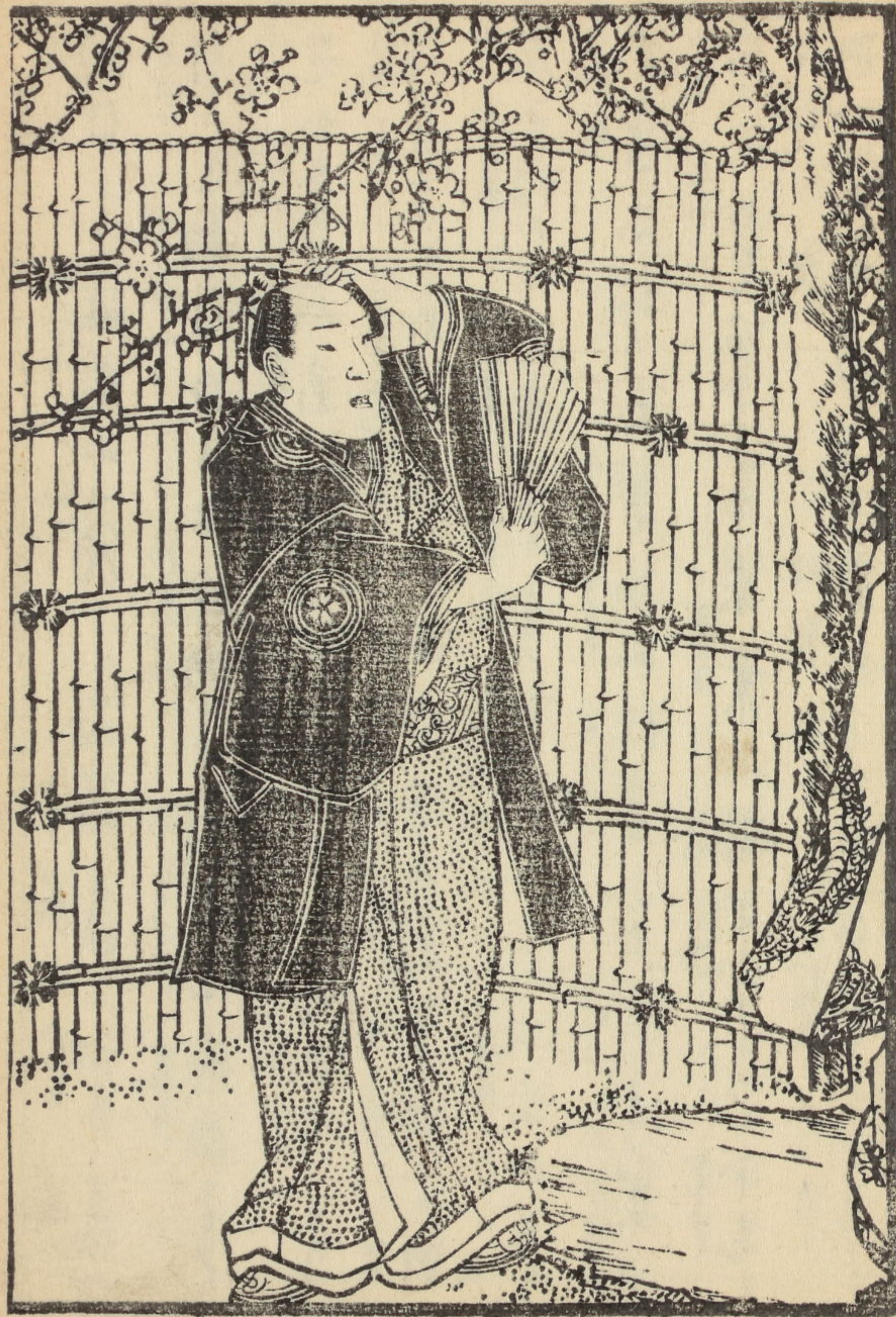
その後ハ表向ハ美より附合りても是ハ不極あ大
一物ガあつたゞあつたゞと思ひのやう附あ姫ごさんが今
度どの類ると恨と令よ茶ちさんハ驚おうせむともも色いろ心こ互ごの
信しん實じつガあ方かたへあはは合あへば中ちゆうへ遠入いりて甲かう斐ひガ
あるとまこれであらういふ次つぎハあらうがお茶ちの顔ハまるこ
あやアあねらうあいまハ驚うぞもありまはしけしとも
茶ちさんを又また抱か女にハあらうちやアあらうもかが海まい
子こエト獨ひとりりを痛いたく折しも茶へ附姫ご若わかきさんく

アレあサさ羞はむもお見のり久く大おそううみさまておないとヨ
ト中り起さまて目と覺一あいマヤ今のハ羞はむ心
ありましうう子こエハ驚おろしとおろしの久久くまらず
今いまお由さんが梅うめと見まらう遠嶋との峯さんの
別わかれ入大お勢せ連れん心こ住すくくと言りておないとうう
お茶と誘ひ小茶ちのこのこト言りまさて附つく附姫ご
若わかき人知し地ぢみどうりあける
竹たけ葉は那な若わかきがあらうまばうる羞とバ

第三十四

婿もお糸と房をふおの内のあぐらきめは小梅の
お由が世せしきあり彼お糸の身のうちハ市常
き湯が引清にあり後き湯と相決のうらねお
万藤よりお糸の母へ言入さききば柳川亭の母
親ハ娘と一個拾ひいどききよとび大うさるる
早速峯次郎の母も報知て相決ぬるむねに
今度ハ名ふ意ハ後き湯と市常き湯が世活さるる

女たりののう筒で返着るりぐく余愛るる
峯次郎の父も報知てお糸お房が身の内
如何きさんと核合へ父も昔ハ小金もつるひ
通者の采るる今更ハ化言も言ふは上六藤
兵衛と市常き湯小住する所のいお糸お房の身
所付又峯次郎が以末とも放捨のうき梅もよく
きこへ下さるる金子のところハ何程ありとも此
方ぬて出さるる見苦しくさきかうお取半ひを



好男美婦
 迎客の
 不莊小
 集會ナ
まろくさう
あつちん

頼むより返書お及び一久藤藤と市年藤ハ
種々と相談のう各途崎の別荘を燈後
先お糸を不是小後せお房も輝多川より
引ぬりて柳川亭の母侶俱お是をも同ド別
荘お使六世お糸ハ素より本妻のまぶ以茶のどく
本家おありて舅姑お仕ゆる小ぞ是より筆次
常も心とありて家業お精と出しつ、本宅と
別荘お整りく不寐起しくとも睡しくも書し

ける老角あるるふ其年も書是又立降る新王の
梅咲く春とあり一久る老皮身とありしも
茂多藤史輝と市年藤が一方るぬ懐切の原さ
世活中も有りするの友是号の人とたどあといく
お色人々を梅見がくふ招くんと其由を觸まへ
其バ日途崎の別荘へ寄り集りて人々
千葉の茂多藤 小梅のお中 四谷の市年藤 同娘小梅
丹次弟 お蝶 八十八子あり 茶八 柳姫台 お茶

